

記念号発刊にあたって

史学科主任 安村直己

本号は、二〇二四年三月をもって青山学院大学を退職される阪本浩教授の退任記念号となります。

阪本先生は一九五四年、宮城県仙台市にお生まれになり、一九七四年に青山学院大学文学部史学科に入学、卒業後は東北大学大学院文学研究科西洋史学専攻に進まれた。一九八二年に博士後期課程を退学、東北大学文学部助手に就任され、一九八五年に本学文学部史学科に専任講師として着任された。以後、一九九〇年に助教授、一九九七年に教授に昇任され、現在にいたっている。なお、二〇一四年に史学科主任、二〇一六年に文学部長、二〇一七年に副学長、二〇一九年に学長と学内行政上の要職を歴任され、合わせて四〇年の長きにわたり研究、教育、学内行政とあらゆる面で史学科および本学の発展に貢献してこられた。

二〇一九年一月から二〇二三年一月までの学長在任期間は、国際社会、日本社会が新型コロナウイルスに翻弄された時期とほぼ重なっている。日本社会全体が混乱に陥るなか、授業のオンライン化をはじめ、的確な措置をとられ、在校生の学ぶ権利を最大限保証することにつながったことは、特筆に値する。他方で同じ時期、高校の指導要領が変更されるとともに、大学設置基準が改正されたこともあり、阪本先生は入試体制の見直しや、大学組織の改編などにも注力されたのであった。

このように学内行政で活躍されたとはいえ、その本領は大学教員としての研究、教育において発揮された。学部長、副学長、学長として多忙を極めるなかでも教員としての務めを疎かにすることなく、西洋古代史を専攻する四年生に対して卒論指導を続けられたのは、その現れである。二〇一六年以降、合わせて四冊の研究書を翻訳、

出版されたことは、研究面でも研鑽を怠らなかつた証左といえよう。

阪本先生の研究対象は古代ローマ帝国史、なかでもローマ宗教史である。ローマ帝国史は、欧米各国の多数の研究者が一九世紀以来、研究を重ねてきた分野であり、細分化が著しい。加えて、イタリア、ドイツ、フランス、イギリスなどは各国ごとに特色のある研究史を築き上げて今にいたっている。参照すべき文献は膨大にあり、ややもすれば重箱の隅をつくような個別研究に終始するおそれもあるなかで、留意すべきは阪本先生が別の地域や他の時代との比較の視座を保ち続けた点である。そのことは、世界史上の数々の内戦を取り上げ、分析と総合を試みようとしたデイヴィッド・アーミテージの著作『内戦』の世界史（岩波書店、二〇二〇年）の共同翻訳に挑まれた事実にも明らかである。

教育面に話を戻すと、阪本ゼミは二年次末のゼミ選択時、古典ギリシア語、ラテン語の習得義務を課していたにもかかわらず、毎年かなりの人数を受け入れていた。なかには、語学が得意とはいえない学生もあり、丁寧な指導が学生の間で評判になっていたからこそ、そうした学生も西洋古代史に挑んだのであろう。他方で、大学院に進学し、研究教育職を目指す学生も育てられており、先生のエducatorとしての懐の深さを垣間見ることができる。ここ数年は、廊下ですれ違い、なにげない会話を交わしたりすることも少なく、司会者としてのお姿をパソコン画面で拝見することの方が多いほど、多忙な日々を過ごされていた阪本浩先生。長い間、ほんとうにありがとうございました。